

J R線路と国道を越える連絡橋を 有する公立南丹病院の新病棟

公立南丹病院長 梶田芳弘



写真① 新病棟からみた連絡橋と旧病棟

には住宅が密集し、駐車場スペースも不十分な点が問題となったため、旧病棟と国道およびJR線路を連絡橋でつなぐ新病棟建築を計画した。平成14年12月に連絡橋、平成15年1月新病棟がそれぞれ完成した(写真①・②・③)。連絡橋は地上7mで内部の幅4.5m、高さは3mで94.7mの長さからなり、新旧病棟の3階で連結している。計画から完成まで約7年の経過を有した。理由として建築用地が農地のため都市計画変更の承認や、連絡橋設置のために京都府、JR西日本、国道工事事務所との協議に時間を要したためである。またJRと国道を越える連絡橋自体が西日本では稀有な建築物であったことも原因となっている。



写真③ 連絡橋の内部

四季の移り変わりから取り残されがちな患者様のみならず職員の憩いの場ともなっている(写真④)。

その他新病棟には連絡橋以外にも、1階に70床の腎センター(約300人の患者様の透析が可能)があり、最上階の5階には小児長期入院患者の学びの場である院内病弱学級や、職員全員の集まりや教育の場となり、災害時には患者様の収容施設ともなる医療設備の整備もされた講堂がある。そして、屋

病院の沿革

公立南丹病院は昭和11年4月京都府船井郡八木町に開設された。当病院は京都府のほぼ中央に位置し、亀岡市、船井郡、北桑田郡の1市8町で構成されている一部事務組合の公立病院である。医療圏としては府内で最も広く、琵琶湖の2倍の面積に当たる。開設当初は結核医療を中心としたが、地域住民からの要望を受け、現在この地域唯一の急性期医療の拠点となっている。

連絡橋および新病棟建築の経過

平成7年10月に100床増床(計450床)を伴う整備計画に着手した。この建設に際し、病院隣接地



写真② 国道9号線とJR山陰線を越える連絡を有する新病棟(左側)

連絡橋と新病棟建築の利点や問題点

問題は当然連絡橋の長さである。外来部門、放射線部門、検査部門、手術部などが旧病棟側にあるため、新病棟との移動に、患者様及びスタッフの負担が大きく、そのため看護部は看護助手などの業務を含め改善を進めている。しかし、問題を上回る利点があると私は考えている。連絡橋は丁度北は舞鶴など裏日本、南は京都方面から来院する患者様にとって丁度よい目印となり、本院の象徴とも考えている。また歩行練習などのリハビリのための格好の場ともなる。連絡橋内部の壁には、近隣の小中学校の児童・生徒の優秀絵画を展示しており、患者様のみならず職員、お見舞い客の心を和ませている。さらに連絡橋の広い窓から見える四季折々の風景は素晴らしく、



上には災害拠点病院としての機能を果たすべくヘリポートを備えている。

おわりに

公立南丹病院とっておきのものとして国道とJR線を越える連絡橋や新病棟について述べた。患者様の移動などの問題から、長い連絡橋の欠点が指摘されるが、私は、その長所を探し出して生かし、今後の病院の発展に寄与させたいと考えている。



写真④

- 一番目 リハビリ歩行中の患者様
- 二番目 優秀絵画の展示
- 三番目 窓から見える桜(春)
- 四番目 大堰川の花火大会(夏)